

ブルクハルトの〈ルネサンス=近代〉観の妥当性

——『イタリア・ルネサンスの文化』再読——

鳥 越 輝 昭

はじめに

ヤーコブ・ブルクハルト(1818-97)の著書『イタリア・ルネサンスの文化』(1860)は、最近のイタリア概説史のなかでも¹⁾、「古典的著作であり、いまでも読むと新鮮で、印象深い」と評されているとおり、あいかわらず声望が高い。だが、この書はまたきびしい批判もうけてきたし、すでに乗りこえられた書であるかのようにいわれることもある²⁾。しかし、ブルクハルトの主張は、じつはあいかわらず妥当なのではないか。ただし、わたくしがそれを妥当だというのは、従来のブルクハルト批判とおなじ観点からではない——。

一般に、『イタリア・ルネサンスの文化』には、それがヨーロッパの中世文明を否定的にとらえ、その文明とイタリア・ルネサンス文明とを非連続的に対立するものと考えて、イタリア・ルネサンス文明を賛美し、それを近代ヨーロッパ文明の直接の祖先とみなし、近代ヨーロッパ文明をもまた肯定的にとらえた、とのイメージがつきまとっているのではなかろうか。近代主義者にして、イタリア・ルネサンスの賛美者ブルクハルトというわけだが、このイメージは、部分的には正確でも、全体としては正しくないだろう。

ブルクハルトがイタリア・ルネサンス文明を近代ヨーロッパ文明の直接の源泉とみなしていたとのイメージは、あきらかに正しい。ブルクハルトは、イタリア・ルネサンスの「文明」が、「われわれの文明にもっとも近接していて、いまなお作用をおよぼしつつけている母」なる文明だった、と断言しているからである(p. 3)³⁾。そして、ここでいう「わ

れわれの文明」が、近代ヨーロッパ文明のことであることもまちがいない。なぜなら、ブルクハルトは、イタリアにおける古代の再生と、それにたいする反作用とから生じた「イタリア人の近代的民族精神」が「全ヨーロッパにとっての決定的な模範となった」、といているからである(p. 129)。

ブルクハルトが、イタリア・ルネサンス文明とヨーロッパ中世文明とを対立的・対照的・非連続的にとらえた、とのイメージもまた正しい。それは、つぎの箇所、明瞭にあらわれている。

中世には、意識の両面が——すなわち、世界にむかう面と、人間自身の内面にむかう面の両方が——両者に共通するヴェールの下で完全に眠っているか、または半ば眠っている状態にあった。そのヴェールは、信仰と、子供のような偏見と、妄想とによって織られたもので、そのヴェールをとおして、世界と歴史とがふしぎな色合いをおびて見え、人間は、人種・民族・党派・団体・家族ないしは何らかのかたちの集団としてのみ、自己を認識していた。このヴェールは、はじめてイタリアにおいて、空中へ吹き飛ばされた。国家と、現世の万事とにかんする客観的な考察ならびに取りあつかいが目覚め、それとともに、主観も、完全な力をともないながら、身を起こした。人間は精神面で個人となったし、また自己を個人として認識するようになった(p. 29)。

ブルクハルトがヨーロッパ中世文明を否定的にとらえたとのイメージもまた、『イタリア・ルネサンスの文化』についていうかぎりには⁹⁾、正しい。中世文明にたいする否定的態度は、上の引用文中にも明瞭にあらわれていたし、また、別所にはつぎのような記述もみられるからである。

中世文化の形態と観念とを郷愁をいだきながら回顧しているひとは、かりにそれらの形態と観念とのなかで一時間でもすごせば、近代の空気を切望することだろう(pp. 127-8)。

だが、注意しなければならないのは、ブルクハルトの場合には、ヨー

ロップの中世文明を否定的にとらえることが、イタリア・ルネサンスの文明とヨーロッパの近代文明とを全面的に肯定・賛美することにはつながらなかったことである。

1. イタリア・ルネサンスの暗黒面の把握

すでに再確認したように、ブルクハルトはイタリア・ルネサンス文明がヨーロッパ近代文明に「もっとも近接した母」なる文明だとみなしていた。だが、その母なる文明の実態をブルクハルトはどういうものとみなしていたか。

『イタリア・ルネサンスの文化』がイタリア・ルネサンスを重視した書であることは明白だし、それがイタリア・ルネサンスを高く評価した書だという印象も、あきらかに感じられる。そしてまた、この書の初版出版の十年後におこなった講義『世界史的諸考察』のなかで、ブルクハルトは、十五・六世紀にイタリアからヨーロッパ全体におよんだルネサンスが「純粹の再生」であって、自発性、その勝利を裏付ける明らかな勢い、生のあらゆる領域の拡大、汎ヨーロッパ的性格を特徴としていた⁵⁾、とのべているのをみても、ブルクハルトがイタリア・ルネサンスを高く評価したことは疑いがない。しかし、高く評価したということは、全面的に礼賛したということではない。

ブルクハルトは、『イタリア・ルネサンスの文化』のなかで、十六世紀初頭——ルネサンス文明が頂点にたつると同時にイタリアの政治的災厄が不可避であるのがあきらかになった時期——に、マキャヴェッリがその災厄とイタリア人の「はなはだしい不道徳性」とをむすびつける発言をしたことに注目している (p. 312)。そのときマキャヴェッリは、「われらイタリア人は、ほかのどの民族よりも非宗教的で邪悪である」と書いていた。ブルクハルトは、この発言が、冷厳なリアリストによる発言だったことを重視している。そういう人物の発言ならば傾聴にあたいます、というわけである。

ブルクハルトは、マキャヴェッリの批判は、つぎのように言い換えることもできたのではないだろうか、という。

われわれイタリア人は、ほかのどの民族よりも個人的になった。イタリア人は、道徳と宗教の制約から解放されている。そして外面的な法律も無視している。なぜなら、われわれの支配者は非合法的な支配者だし、かれにつかえる役人・裁判官も極悪非道な連中だからである (*Ibid.*)。

そしてブルクハルトはこのあとで、マキャヴェッリが、「教会とその代表者たちが最悪の実例を提供している」とつけくわえていることを指摘する (*Ibid.*)。要するに、ブルクハルトは、当時のイタリア人が、法律・宗教・道徳を無視してもふしぎのない外的条件のもとにあった、といったのである。これは礼賛の対象になる社会状態ではなさそうではないか。だが、結論をいそがずに、ブルクハルトの他所での論述を見直してみることにしよう。

じつは上の引用文を見ただけでも、ブルクハルトが、この時代の統治者たちの非合法性・非道徳性に注目していることは推測できるのだが、われわれは、それとあわせて、当時のイタリア諸国家の多くを「警察の暴力に基盤をおいている非合法的な国家」だったとブルクハルトが明言しているのを見直すべきだろう (p. 325)。

さらに、ルネサンス期イタリアの政治権力のありかたについては、つぎの記述がなされているのも注目される。ブルクハルトは、この直前で、十四世紀のイタリアの政情について、神聖ローマ皇帝の力が弱まって、既存の政治勢力の指導者・補強者にしかなれない存在とみなされはじめていたことを指摘し、ローマ教皇が、イタリア統一をさまたげることではできても、みずからそれを統一するだけの力をもっていなかったことを指摘したところである――。

神聖ローマ皇帝と教皇庁とのあいだの空隙に多数の政治形態――さまざまな都市と専制君主たち――が存在していた。それらの一部はかつてから存在していたものであり、一部はあらたに成りあがったもので、後者の存在基盤は、現実に政権をにぎっているという事実のみにあった。これらの政治形態のなかで、はじめて、近代ヨーロッパの国家精神が固有の衝動を自由に発揮するのがみられる。これらの政治形

態は、ひんばんすぎるほどに、もっともおそろしい諸特徴をさらけだしながら、なにものにも束縛されない利己心をしめす。だが、この傾向が超克されるか、なんらかのかたちで埋め合わされたところでは、歴史のなかの新たな存在が活動するのである。それがすなわち、計算され、意識的につくられたものとしての国家、芸術作品としての国家である (p. 4)。

この箇所では、「芸術作品としての国家」という概念が注目されるのがふつうだろうが、われわれは、いま、ブルクハルトがここで、「近代ヨーロッパの国家精神」の特徴を、「なにものにも拘束されない利己心」ととらえ、その初期形態がこの時期のイタリア諸国家にひんばんにあらわれていた点を指摘しているのに注目したい。いいかえれば、ブルクハルトは、これら初期形態の近代国家のなかに、近代ヨーロッパ的な「国家理性」がすでに蠢動するのを見抜いているのである。ブルクハルトは、近代ヨーロッパ国家精神の直接の祖先としてのこれらのイタリア諸国家に、近代ヨーロッパ国家の暗黒面の源泉を見ているといってもいいだろう。

ブルクハルトはまた、この節の冒頭に引用した文中で、十六世紀イタリアの宗教界の腐敗を暗示していたが、その問題については、つぎのくだりに、さらに明瞭にのべられている。

墮落をつづけた教会は、歴史のなかでも他に類例のない重い責任をとらねばならないのだ。教会は、みずからの無制約の権力に好都合なように歪曲した不明瞭な教義を、あらゆる暴力的手段をつかいながら、純粋な真理として押しとおした。そしてみずからに不可侵感がそなわっているのをさいわいに、きわめて重大な不道徳性に身をゆだねた。しかも教会は、そういう状態を固守するために、諸民族の精神と良心とにたいして致命的な攻撃をくわえ、心中で教会を避けるようになった才能すぐれたひとたちを、不信仰と悲嘆の側へ追いやった (p. 333)。

もちろん、ブルクハルトは教会を中世的制度ととらえているのだから

ら、教会へのこういう批判は本質的に中世的なものにたいする批判だったといえなくもあるまい。だが、ルネサンス期における教会の墮落がその時期の社会の墮落の大きな要素だったのは確かだろうし、現に、本節冒頭でみたように、教会の墮落をルネサンス期のイタリア人の墮落の重要な原因だったとするマキャヴェッリの主張にブルクハルトが賛同していた点を重視すべきだろう。

では、そのような非道な政治的・宗教的環境のなかにおかれたルネサンス期のイタリア人を、ブルクハルトは、どのようにとらえているか。ブルクハルトは、「十六世紀初頭のイタリアはひどい道徳的危機におちいっており、善良な人たちでさえそこから抜けだす希望はもてなかった」(p. 313) という。この点についてブルクハルトのあげている例をひろってみよう。

たとえば、男女関係――

……この時期のイタリアに特有だと思われるのは、婚姻関係とそれにとまなう権利とが、他国においてよりもおそらくひんぱんに――そしてたしかに意識的に――踏みじられたことである (pp. 319-20)。

これは、具体的には、ルネサンス期のイタリアの男たちが、もっぱら隣人の妻たちを恋愛の相手として望むようになったことを指している (p. 324)。

こうして、「姦淫してはならない」という「十戒」のひとつを「意識的に」やぶるようになっていたイタリアのルネサンス人はまた、「敵を愛しなさい」というキリストの教えも、良心の呵責なしに無視するようになっていた。すなわち、「復讐は、きわめて率直に、当然の欲求とみなされていた」(p. 470) のである。

そればかりか、一般にイタリア人は国家と法秩序とにたいしてつぎのような考えかたをするようになっていたという。

いまではもう制約はわずかしかなかった。警察の暴力に基盤をおいている非合法的国家の反動からは、庶民にいたるまで、だれでも内心では抜けだしたと感じており、法の公正については、もうだれも信じて

いなかった (p. 318)。

これは当時のイタリア社会が無法状態に近い状態にあったと言ったのにひとしいだろう。

以上のような外的環境と内的状態とがそろっていたために、「全般的に、ルネサンス期のイタリアは、平和なときですら、他の諸国よりひんぱんに多くの犯罪がおこなわれていたような印象がある」(p. 326)、とブルクハルトは指摘する。ブルクハルトは、この印象がぜったいに確実とはいえないと認めながらも、

イタリアでは、金をはらって第三者の手で実行させる計画的犯罪や、職業化した犯罪が、おそろしいほど大きな拡がりを見せたことだけは確かである (p. 327)

という。しかも、事態はつぎのような極端にまでたっしていた。

個性があらゆる面で発達の頂点にたっしたこの国では、絶対的な意味で卑劣な者たちがあらわれた。この者たちは、犯罪を、ある目的への手段としてか、あるいははすくなくともいくつかの目的への手段としてではなくて、それ自体のためにおこなって、あらゆる心理的規範からはみ出してしまっていた。

思うに、伝統的なキリスト教思想家なら、この時期のイタリア人は、救済される以前の状態に逆戻りしてしまった、とでもいいそうなところである。

しかもブルクハルトによるルネサンス期イタリアの暗黒面にかんする指摘には、つぎのようなものもみられる。

イタリア人は自由と必然性について熟考した最初のヨーロッパ人であり、かれらはこの熟考を、暴力的で公正を欠いた政治状況のなかでおこなうとともに、悪人たちの輝かしく持続的な勝利をひんぱんに目撃したため、神意識がゆらぎ、かれらの世界観は部分的には宿命論的

になった。そしてかれらが、熱情的だったがゆえに不確かなことをそのままにしておけなかったとき、多くの場合には、古代・東洋・中世の迷信によって補足して満足を与えて、占星術師や魔術師になった (pp. 359-60)。

ブルクハルトによれば、迷信のうち、占星術は、十三世紀になってから突然に、イタリア人の生活の前面にでてきたものだった (p. 373)。すなわち、中世後期にあらわれた現象である。だが、その後、この迷信はますます盛んになり、諸君主・諸都市・教皇たちには、おおかえの占星術師たちがいて重要な行動に際して相談をうけ、各大学でも十四世紀から十六世紀まで占星術が講義されるようになった (*Ibid.*)。しかも、ブルクハルトは、占星術の示唆にしたがってなされる決定は、良心と名誉とを犠牲にしてなされることが「あまりに多かった」、という (p. 373)。また「永遠の教訓とすべきは」、占星術という「この妄想にたいして、あらゆる教養も啓蒙も、長いあいだ太刀打ちできなかったこと」だった、というブルクハルトの発言も注目される (*Ibid.*)。ブルクハルトは、イタリア・ルネサンス文化の墮落と脆弱さを捉えていたのである。

魔術と魔女についても、ブルクハルトは、ルネサンス期になって、いわゆる魔術師や魔女が火刑に処せられはじめてから、ほんものの呪文や故意の魔術がひんばんにおこなわれるようになった、との逆説的な事実を指摘している (pp. 384-5)。そして魔女にかんしても、1484年に魔女の告訴を指示する教皇大勅書がだされてから、魔女の活動と魔女への迫害とがどちらも盛んになり、迫害の先鋒となったドイツ人ドミニコ会士たちの活動したドイツや、ドイツに近接したイタリアで、魔女の活動がもっとも著しかったという、逆説的な実例をあげるのである (pp. 387-8)。

魔術については、ブルクハルトは、十四世紀には盛んだったが、十五、十六世紀と時代を下るにしたがって、下火になっていったと指摘する (p. 396)。しかし、ブルクハルトはその過程のなかにも、逆説的な現象をとらえる。

魔法信仰の減退は、人間生活の道徳的秩序にたいする信頼の増加へと必然的にかたちを変えたわけではなくて、おそらく多くの場合には、占星術信仰が消滅していったときと同様に、おぼろげな宿命論になったということを、ここでたしかに付けくわえておかねばならない (p. 397)。

こうしてみると、ブルクハルトはルネサンス期イタリアに輝かしさのみに見ていたどころか、むしろ多くの影をとらえていたことがわかる⁶⁾。しかもブルクハルトは、のちに強調されるような「魔術的ルネサンス」⁷⁾にも、すでに注目していた。

2. 逆説的認識

このように、ブルクハルトは、イタリア・ルネサンスを全面的に礼賛していたわけではけっしてない。しかしブルクハルトは、ルネサンス期イタリアを——したがってまたヨーロッパ近代を——全面的に否定したわけでもない。ブルクハルトのそういう立場を再確認し、そういう立場が、どういう精神に由来しているのかについて、しばらく考えてみたい。

われわれはまず、ブルクハルトが、ルネサンス期のイタリア人（ただし上流階級）の性格について、つぎのようだったと述べていることを思いだしておこう (pp. 331-2)。——この時期のイタリア人は、国家（多くの場合に専政的・非合法的だった）から離反し、それへの裏切りを考え、実行した。対人関係では、みずからの権利をまもろうとして復讐するのがつねであり、それによって邪悪な力の虜になった。また、当時のイタリアの男たちは、隣人の妻を望むことがしきりだった。そういう状態をブルクハルトは約言して、「あらゆる客観的なもの、あらゆる種類の制約と掟とにたいして、当時のイタリア人は自分が絶対的に優越していると感じていた。そしてあらゆる場合に、自己の内なる名誉感、利益、抜け目ない考慮、情熱、断念、復讐心にしたがって、みずから決定をくだした」 (p. 332)、と述べている。

ブルクハルトも指摘しているように、こういう「個人性の発達」あるいは「利己心」こそが諸悪の根元だとする見かたが当然ありうるだろう (*Ibid.*)。それが、おそらく、伝統的キリスト教の正統的見かただろうと思われる。そこでは、「心の貧しい人々は、幸い」だといわれるからである。その見かたからすれば、ルネサンス期のイタリア人は、キリスト教以前の状態に逆戻りしたとでもいえるだろうか。

しかしブルクハルトは、そういうキリスト教的立場を意識しつつも⁸⁾、当時のイタリア人の状態のなかに、ひとつの逆説をとらえる。

こういう性格の根本的欠陥が、同時にイタリア人の偉大さの条件となっているようだ。その条件とは、すなわち、発達をとげた個人主義である (p. 331)。

一般に、ある現象の明暗両面を同時的・逆説的に把握できる人物は、その現象をめったに一面的に否定することがない。そういう能力をじゅうぶんにそなえていたブルクハルトもまた、イタリア・ルネサンスがイタリア人にもたらした暗黒面をじゅうぶんに認識しながらも、イタリア・ルネサンスを否定的にとらえなかったのである。

イタリア・ルネサンスにかんするブルクハルトの逆説的評価は、つぎの箇所にも明瞭にあらわれている。

極悪非道さと隣りあいながら、個々人の尊い調和が発達し、輝かしい芸術が発達した。その芸術は、古代ならびに中世は望みもせず知りもしなかったような、個人としての生きかたを賛美する、輝かしい芸術だった (p. 332)。

いずれの引用箇所についても、注目したいのは、ブルクハルトによるイタリア・ルネサンス評価が、手放しの礼賛とはほど遠いものであり、暗黒面をじゅうぶんに認識したうえでの、「にもかかわらず」的肯定とでもいえそうな面をそなえていることである。しかし、ブルクハルトのイタリア・ルネサンス観について注目されるのは、それが歴史事象の逆説的な両面把握をしていることだけではない。

3. 個人性の源泉としてのルネサンス

つぎの箇所にも、ブルクハルトの注目すべき考えかたがのべられている。

こういう個人性の発達、かれらイタリア人の罪によってかれらに訪れたのではなくて、世界史的必然によって訪れた。そしてまた、個人性の発達、イタリア人だけに訪れたのではなくて、本質的にイタリア文化を仲介者として、ヨーロッパ中の他のすべての民族にもおとずれ、それ以来、これらの諸民族が生きる場合の最高の媒体になっている。個人性の発達それ自体は、良いものでも悪いものでもなく、必然的なものだった。個人性の発達のなかで、近代的な善悪、すなわち、道徳にかんする近代的な責任のありかた——中世的な責任のありかたとは本質的に異なるもの——が発達したのである (*Ibid.*)。

この箇所で注目すべき点は四つあるだろう。ひとつは、「個人性の発達」が、中世的倫理とは異なる近代ヨーロッパ的倫理を生じさせた、との捉えかたがなされていることである。ブルクハルトは、人間が、個人として、「自己の内なる名誉感、利益、抜け目ない考慮、情熱、断念、復讐心にしがたって、みずから決定をくだ」して、はじめて個人としての道徳的責任も生じた、と考えている。それは、あまり異論の余地のない考えかただろうから、いまくわしく論じる必要はあるまい。

第二に注目されるのは、ブルクハルトが、個人本位のそういう行動のしかたは、ルネサンス期のイタリア人からはじまって、もっとも重要な価値（「最高の媒体」）として、近代ヨーロッパ全体にゆきわたった、とみなしていることである。これは、おそらく、ブルクハルトが、個人性の存在しているかぎりにおいては、イタリア・ルネサンスと近代ヨーロッパをたしかに高く評価したということの意味しているはずである⁹⁾。

その点は、ブルクハルトが、『世界史的諸考察』のなかで、自分の同時代の問題として、国家権力の拡大による個人の圧迫に危惧を表明して

いることを思いだせば、かなり明瞭になるだろう¹⁰⁾。この書のなかの論述によれば、国家は、フランス革命期の恐怖政治とフランス帝政期の専制政治とに由来する「権力概念の大幅な拡大」を維持・拡大しようとしていたのであり (p. 133, p. 192), また「営利と交易の時代」の主役となった産業界も、国家ができるだけ強力であることを願っていた (p. 133)。しかも、ブルクハルトの見かたでは、この国家権力概念の拡大は、啓蒙思想家たちに発する「人民主権」ないしは「民主主義」の理念に由来していた。

……国家にかんする思索は、国家のために周期的に立てられるあらゆる洗練された計画を実現できるように、国家のために、つねにより大きく広範な強制力をもとめる。みずからははなはだ制御しがたいひとたちも、この場合には、全体のもとで個々人をもっとも強力に制御することを望む (p. 134)。

そしてブルクハルトはまた、端的に、「民主主義の立場では、個々人にたいする国家権力がどれほど大きくても大きすぎることはない」 (p. 197) ともいう。国家の側だけでなく、むしろ国民の側から国家権力の拡大をもとめているこの状態は、ある意味では絶望的状态だろう。こうしてブルクハルトは、国家権力が拡大し、個人への強制力の増大することによって、「近代文化にたいする大きな危機が、強力かつ急速に前進している」 (p. 132), と感じていた。

もちろん、ブルクハルトがこういう危機感をいだいたのが、十年以上前の『イタリア・ルネサンスの文化』執筆当時からだったかどうかは、厳密に言えば、わからない。しかし、その当時から、明確な危機感をいだいていた可能性もあるだろうし、それをおぼろげに感じとっていた可能性もあるだろう。そして、仮に事実がいずれでもなかったとしても、同一の人間の精神に連続性があるかぎり、ブルクハルトには十年後の感じかたに向かう素地があったということは、たしかにいえるはずである。

こういう観点からみれば、ブルクハルトにとって、ルネサンス期のイタリアは、幾多の暗黒面を伴ってはいても、「個人」という、近代ヨ-

ロッパにとってもっとも重要な価値（「最高の媒体」）をはじめて生み出した社会として、重要な意味をもっていたのではないか。ブルクハルトがイタリア・ルネサンス研究にとりくんだ理由は、イタリア・ルネサンス期が「輝かしい芸術」を生み出した時代だったことにおとらず、こういう重要な価値の源泉としての「個人性の発達」が、その時期のその場所にあったのを嗅ぎつけたからではなかったか。防衛すべき価値のためには、その根元までさかのぼって本質を知ることが、有効な防衛手段になるものである。

さて、さきほどの『イタリア・ルネサンスの文化』からの引用文中で注目される第三点は、「個人性の発達」——あるいは「利己心」の発現——が倫理的に中立なものとして捉えられていることである。そして、ブルクハルトがなぜそれを倫理的に中立なものとみなしたかの根拠も、この引用文中にみられる。

それが、すなわち、「個人性の発達」を「世界史的必然」によって生じたものだとする捉えかたであり、引用文中の第四の特徴となっているところのものである。「個人性の発達」が「世界史的必然」によって生じたものなら、それを特徴としたイタリア・ルネサンス社会が極悪非道の社会であっても、「個人性の発達」そのものは、道徳的には中立の現象とみなされて当然だろう。しかも、もっと重要なのは、「個人性の発達」が「世界史的必然」ならば、それは基盤のきわめて強固な価値だということである。それなら、国家主義ないし「民主主義」に抵抗する場合の強力な武器になりうる。（ただし、「世界史的必然」という考えかたは諸刃の剣でもある。なぜなら、国家権力の拡大もまた「世界史的必然」である可能性もあるから。）

じつは、こういう「世界史的必然」という考えかたがみられるのは、上の引用文中だけではない。そういう考えかたは、つぎの箇所にもあらわれているから、ブルクハルトのものの見かたのひとつの特徴だろうと思われる。ブルクハルトは、ここで、イタリア・ルネサンス期の「世俗性」について語っている——

……この世俗性は真剣なものであるうえに、詩と芸術とによって高貴にされた世俗性だった。もはや世俗性をけっして払いのけることがで

きず、人間と事物との探求に抵抗しがたく駆りたてられ、そのことを自己の使命とみなすのが、近代的精神にとっての崇高な必然性だった。いつ、どの道をとおって、この探求が近代的精神を神に立ちかえらせるのか、その探求がどのようにして個々のかつての宗教性と結合されるのか、ということは、一般的規定によって解決されうる問題ではない。中世は、経験と自由な探求とを省略していたから、この重大な問題のなかでは、なんらかの教条的結論をもって、再起することはできない（pp. 532-3）。

ここでブルクハルトは、近代的精神がもっぱら此岸的問題の探求をおこなうようになった事実を、本質的には「世界史的必然」の発現とみなしている。だが、注目されるのは、それだけではない。

この文章を読むと、ブルクハルトが、人間が此岸的問題のみに関心を集出し、神から——あるいは彼岸的問題の探求から——はなれている状態を、進歩であるともみなさず、ましてや理想的状態だともみなしていないことがわかる。その点に注目するなら、ブルクハルトを、此岸性の全面的肯定者という意味での近代主義者だとは、けっしていえないだろう（それはちょうど、〈近代国家権力の拡大＝民主主義の伸張〉を憂慮したブルクハルトが近代主義者でなかったのと同然である）。それどころか、ブルクハルトは、むしろ、神に立ちかえったときに人間は理想的状態になる、とすら考えているようにみえる。だがブルクハルトは、そういう立ちかえりのためにも、所与となっている（「世界史的必然」）近代的精神状況を経由しなければならない、と考えているようである。そういう近代的精神状況を正確に把握するためにも、ブルクハルトは、近代的此岸的態度の源泉であるイタリア・ルネサンスの研究にとりくむ必要を感じたのではなかったか。

むすび——ブルクハルトの主張の妥当性

『イタリア・ルネサンスの文化』への批判のひとつは、この書がヨーロッパ中世を否定的にとらえたことにたいするもののようである。そういう批判は、ゴシック期の建築が美しく独創的だったことや、社会制

度・政治制度が強力だったことや、哲学・科学の研究水準が高かったことや、古代の文芸の復興がすでに中世の北ヨーロッパでおこっていたことを論拠にしてきたという¹¹⁾。

もうひとつの批判は、この書がイタリア・ルネサンスを近代ヨーロッパの直接の祖先とみなしたことにたいしてだったようである。それにたいする批判としては、ルネサンスが近代の科学技術や大衆教育にたいしても、民主主義という理念にたいしても貢献しなかったことや、近現代がルネサンス期とちがってラテン語文学の無視される時代になったことや、美術・建築の規範がルネサンス=古典様式の規範を否定するようになったことが論拠にされてきたという¹²⁾。

第一の批判については、『イタリア・ルネサンスの文化』のなかで、いわゆる「カロリング朝ルネサンス」に、ブルクハルトがすでにふれていたことを再認識しておくべきだろう (p. 207)。ただし、ブルクハルトは、「カロリング朝ルネサンス」と、のちのイタリア・ルネサンスとのあいだには質的なちがいがあると考えていた。すなわち、ブルクハルトは、前者が古代の個々の要素を、学習・考察のすえに利用した部分的再生だったのにたいして、後者は学者も民衆も古代全体そのものに参加した全面的再生だ、と考えたのである (*Ibid.*)。しかし、ブルクハルトのそういう判断の当否については、その方面の専門家にご研究いただければよい。わたくしがいま注目したいのは、それとはべつの点である。

この拙稿で見直したように、『イタリア・ルネサンスの文化』におけるブルクハルトのほんとうの関心がつぎの諸点にあったとすれば、どうか。すなわち、「個人性」あるいは「利己心」の発達は、ヨーロッパ中世にはおこらず、イタリア・ルネサンス期になって生じ、そうして発達した精神態度が、近代ヨーロッパ各地にひろまり、近代ヨーロッパ最大の価値となったこと。個人の責任を問う近代的道徳もまた、そのような「個人性」の発達と普及とに伴うものであったこと。そして、「個人性の発達」は「世界史的必然」の結果であって、倫理的に中立的であること。これらがブルクハルトのほんとうの関心事であり主張点だったとすれば、それらは、あいかわらず妥当であるか、すくなくともじゅうぶんな考察にもあたいるのではなかろうか。それは、つぎのような理由からである。

第一に、ヨーロッパ中世に「個人性の発達」が生じなかったとのブルクハルトの指摘は、上記の批判にみられる、ゴシック時代の建築の美しさや独創性、社会制度や政治制度の力強さ、等々の指摘によって、否定できるものではあるまい。そして、ヨーロッパ中世社会を研究するひとたちも、その社会が共同体的だったことは、おそらくみとめるのではないか。それならば、この点にかんしては、ブルクハルト説にたいする反論は、的を外れてしまっている。かりに、この点に関連してブルクハルト説を論駁できるとすれば、イタリア・ルネサンス期に「個人性の発達」が生じなかった、というじゅうぶんな反証を提出することによるしかないはずである。

第二に、個人がみずからの判断にもとづいて行動するようになって、個人に道徳的責任が問われる社会が生じ、それこそが中世ヨーロッパとは異なる近代ヨーロッパ社会だ、とするブルクハルトの認識も正しいはずである。

第三に、「個人性の発達」が近代ヨーロッパにとっての所与だったとするブルクハルトの認識も正しいだろう。しかも、中世にはなかった「個人性」が、近代ヨーロッパの個々人・社会・国家のなかで、（それに反発する力とともに）強力な生命をたもってきたのは一般にみとめられる事実だろうから、ブルクハルト説は、その点でも妥当である。

第四に、上記の批判にみられるような、ルネサンスが科学技術の発達や大衆教育に貢献しなかった、民主主義という理念がルネサンスになかった、等々の理由によって、イタリア・ルネサンスがヨーロッパ近代に連続しない、とする批判も、ブルクハルトがふたつの時代の連続のかなめとみなしたものが、「個人性の発達」という、精神態度であれば、批判は的をはずれてしまっている。ここでも、ブルクハルト説は、論理的には、ルネサンス期のイタリアで「個人性の発達」が生じなかったことを証明することによってしか、論破できない性格のものである。

しかも、社会全体の世俗化、脱キリスト教化とそれにとともなう漠然とした宿命論の流行、国家への不信、婚姻関係の空洞化というような、ブルクハルトがイタリア・ルネサンス期の社会にとらえた現象は、ヨーロッパが近代から現代へと下ってくるにしたがって、いよいよ顕著になる傾向をみせたともいえるだろう。その意味でも、イタリア・ルネサン

スを近代ヨーロッパの「母なる」文明だととらえるブルクハルトの主張は的中しているかもしれないのである。

- 1) Harry Hearder, *Italy : A Short History*, Cambridge, etc., 1990, p. 269.
- 2) たとえば、若桑みどり氏は(『朝日新聞』1994年6月5日),「ブルクハルトがこの〔ルネサンス〕文化を近代の発端においたが、このロマンティックな解釈は、近代化概念の変化によって破綻」と書いている。
- 3) 引証はすべて、Konrad Hoffmann ed., *Die Kultur der Renaissance in Italien: Ein Versuch*, Stuttgart, 1988 による。ちなみに、Zivilisation が、ここでブルクハルトの使用した語である。書名につかわれた Kultur とでは意味に多少のちがいがあると思われる。英訳・仏訳・伊訳は書名に Civilisation, Civiltà の語をあてているが、Zivilisation でなく Kultur について書くのがブルクハルトの主眼だったということもありうるかもしれない。
- 4) 『世界史的諸考察』のなかには、中世にたいして、やや肯定的なつぎのような判断がのべられている。——「個人はまだ束縛されていたけれども、階級制度のなかの精神の領域では束縛されていなかった。ここでは、個性が自由に発揮され、善意を発達させたので、ひじょうに多くの真の自由が現実存在していた。……いずれにしても、中世は、その後の時代に、国家としての罪をのこさなかったのであるから、中世にたいしては批判的言辞をつつしむべきだろう。」(p. 131)
- 5) Rudolf Marx ed., *Weltgeschichtliche Betrachtungen*, Stuttgart, 1978, pp. 67-8. 引証はいずれもこの版による。
- 6) つとに下村寅太郎(『ブルクハルトの世界』東京, 1983, p. 233)も、ブルクハルトが『イタリア・ルネサンスの文化』のなかでは冷徹な歴史家としての面を見せ、「ルネサンスの絢爛たる光輝と共に同時にその醜悪な暗黒面を……仮借することなく剔抉している」ことに注目している。
- 7) Cf. F. A. Yates, *Giordano Bruno and the Hermetic Tradition*, Chicago, 1964.
- 8) 牧師の家庭にそだち、みずからも神学をまなんだブルクハルトは、人間の罪の問題とキリスト教とを、いつも強く意識しつづけていたように感じられる。
- 9) のちの『世界史的諸考察』のなかでは、個人よりも共同体を優先している発言もみられるが(p. 265), その場合にも国家を優先しているのではない。
- 10) F. バウマー(鳥越輝昭訳)『近現代ヨーロッパの思想——その全体像』(東京, 1992), pp. 551-2 も参照。
- 11) D. ヘイ(鳥越・木宮訳)『イタリア・ルネサンスへの招待——その歴

史的背景』(東京, 1989), p. 16.

12) *Ibid.*, p. 17.